

ヨハネスブルクサミットからの出発」 松下和夫 京都大学大学院地球環境学堂教授)

1. ヨハネスブルクサミットストックホルムから30年、リオから10年

- ①ヨハネスブルクサミットの目的は何だったのか
- ②ストックホルム国連人間環境会議 (1972年)
- ③ブルントラント委員会 (環境と開発に関する世界委員会)と持続可能な開発 (Our Common Future (1986年))
- ④国連環境開発会議 (地球サミット) (1992年)

2.地球サミットの成果と評価

- ①時代背景 :冷戦終結期
- ②先進国と途上国の論争 :資金と技術の移転拡大、貧困撲滅と格差是正、人口問題と生産・消費パターン
- ③環境と開発に関するリオ宣言
- ④アジェンダ21
- ⑤気候変動枠組条約および生物多様性条約の署名
- ⑥森林に関する原則声明
- ⑦砂漠化対処条約交渉開始についての合意
- ⑧財政措置および技術移転に関する取り決め
- ⑨フォローアップ組織 :持続可能な開発委員会 (CSD)
- ⑩評価? 準備プロセス (多様な主体の参画)、財政的コミットメントの不十分性

3. 地球サミット後10年の評価

- ① 各国版アジェンダ21、ローカルアジェンダ21、(日本)環境基本法、環境基本計画
- ② 世界的環境悪化の趨勢とどまらず :森林減少、砂漠化拡大、飲料水不足、生物多様性の減少、IPCC レポート・・・
- ③貧困撲滅進まず、格差拡大
- ④ODA 減少
- ⑤グローバリゼーションのインパクト

4. ヨハネスブルクサミット (持続可能な開発に関する世界首脳会議)の概要

- ①2002年8月26日～9月4日、首脳104名を含む190カ国、2万人以上の参加
- ②主要成果 :ヨハネスブルクサミット実施計画、持続可能な開発に関するヨハネスブルク宣言 (政治宣言)、タイプIIパートナーシップ・イニシアティブ (約束文書)、サイドイベント
- ③主要論点 :「共通だが差異のある責任」
- ④「再生可能 (自然)エネルギー」
- ⑤「衛生」
- ⑥「資金・貿易問題」
- ⑦「京都議定書」
- ⑧「ガバナンス」
- ⑨「貧困撲滅」

⑩ 持続不可能な生産・消費形態の変更」

⑪その他の成果（日本主導のもの）：生物多様性」、科学技術による貢献」統合地球観測戦略など）、北九州イニシアティブ」、持続可能な開発のための教育の10年」

⑫NGOの役割：どこまで意思決定に影響を与えたか。

5.ヨハネスブルクサミットの評価 将来世代からの付託に応えられたか？

①地球環境への危機意識と明確な時代認識に基づくメッセージを発出することがこの会議の本来の目的→果たしえなかった。

②持続可能な開発の実現という理想が主権国家で構成される国際社会という現実との折り合いをつけて、実施計画という形で再出発。

③パートナーシップ・イニシアティブの可能性

④国際合意を越えた地域と市民の取り組み

6.ヨハネスブルクサミット後とそのフォローアップ

①CSD11（2003年5月）決議 2年間の実施サイクル（レビュー会合と政策会合）

②レビュー会合：テーマ別問題群の実施上の制約と障害を明らかに

③政策会合：テーマ別問題群に関し実施を加速するための実地的な措置やオプションに関する政策決定

④水：第3回世界水フォーラム 京都・大阪・滋賀、閣僚宣言 2003.3.23）

⑤気候変動（京都議定書発効問題（ロシアの動向）、EU 排出量取引）、日本 温暖化対策大綱）

⑥自然エネルギー2004（RE2004、ボン）：自然エネルギーの大幅な拡大と日本の立ち遅れ

⑦持続可能な開発のための教育の10年（ESDJ）

⑧国際政治状況（米国大統領選（4.11）、COP10（4.12 気候変動）、G8（4.6）、拡大EU、ロシア、中国、インド…、わが国の役割は？